

仏教と自殺

西 元 宗 助

目 次

はしがき

第一節 原始仏教と自殺

第二節 大乘仏教と自殺

第三節 支那高僧伝と自殺

は し が き

日本人の自殺率が諸外国に比しても高いこと、ことに戦後、青年男女の自殺率が異常にたかくて世界一であることは、こんにち識者のひとしく憂えるところである。ところで、このたかい自殺率の原因は、何によるものであろうか、それには、社会的な要因もあろう、生理的乃至心理的な要因もあるであろう、しかしながら又、思想的な要因、特に戦後の時代思潮によるものもあることも亦見逃しえないのである。

しかしてそのために、われわれが、わが国民の思想生活を、自殺に関して、根源的に分析し解明しようとするならば、久しきにわたって日本

人の思想と感情を培い、国民の日常生活に深い影響を与えてきた仏教—その仏教が、死とくに自殺に対して、いかなる態度をとってきたかを、歴史的にあきらかにする必要にせまられてくるのである。

わたくしは、このような要求にこたえるために、仏教と自殺に関する研究に着手し、そして漸くこのたび、そのまじしい成果を発表することになった。しかして、この小論は、原始仏教から唐宋時代の支那仏教までの、仏教の自殺観とその変遷を概観したものである。これにつづく「わが国の仏教と自殺」（特に浄土と禅を中心に）は、ちかく創文社から刊行される『日本人の自殺』（人性研究会編）に収録されることになった。なお、わが国における仏教と自殺に関する論議は、昭和二年夏、文士芥川龍之介が自殺したとき、その遺書の一節に「僕は紅毛人たちの信じるように自殺を罪悪とは思ってゐない。仏陀は阿含経の中に彼の弟子の自殺を肯定してゐる」（芥川龍之助全集第八卷一—四頁）と書いたことに端を発し、これに対し、当時の一部の仏教者が、龍之介の誤解を指摘し、仏教の立場を弁明することにはじまったことを付言しておきたい。しか

し、その後と雖も、仏教と自殺に関する本格的な研究は案外乏しく、とくに断片的ならみがあったのである。

わたくしは、この点に鑑み、かつは、頭初に述べたような必要にせまられて、この至難なる研究に着手し、さいわい、京都大学・大谷大学・龍谷大学等の仏教学専門学者の指導と示唆のもとに漸く研究をまとめえたのであって、その点、それらの方々の氏名を一一あげないが、深甚なる謝意を表すると共に、かさねて叱正と示教とを願ってやまない。

第一節 原始仏教と自殺

釈尊(B.C. 五六六―四八六?)^{註1}の根本教説においては、たんなる生はもとよりのこと、死も亦迷いであつて、死は決して人生問題の解決とはならぬとする。故に生死流転という。しかして釈尊の仏教とは、これを要約すれば、まさにこの生死の流転を解脱して覚者(仏)となることを目的とする宗教である。

このような立場にたつ故に、原始の根本仏教は当然に本来的に自殺を否定する。即ち仏教は生も死も迷いとみる立場であるから、自殺死は決して問題の解決を意味しないばかりか、特に自己を殺害する行為であるという意味において、自殺を否定する。このことは、原始仏教の諸戒律をみれば自ら明かであつて、たとえば「仏、諸の比丘に告ぐ、自ら身を殺すこと勿れ、身を殺す者も乃至不食の者も亦突吉羅罪をうべし」と善見律(なお、四分律・五分律・十誦律にも同様の言あり)にあり、さらに波羅提木叉には、死を讀えて人をして自殺をなさしめることの波羅夷罪であ

ることが説かれている。しかして、ここで波羅夷というのは教団から放逐される重罪を意味し、突吉羅はそれよりも軽い罪を意味することが注目される。即ちたんなる自殺は自己を殺す殺生罪にとどまるが、他人をして自殺せしめるのは殺人罪であるからである。

右によつて明かなように、釈尊が自殺を否定せられたことは全く疑う余地がない。しかしながら、釈尊と当時の仏弟子の行履を比較的よく伝えているとみられる南方伝五部ニカーヤ並びに阿含経によつてこれを見ると、釈尊在世の原始教団において、すでに仏弟子中に自殺者のあつたことも事実である。それでは、それはいかなる事由によるものであろうか。そして、それに対して釈尊はいかなる態度をとられたのであろうか。それをわれわれは先ず問題にしなければならない。

一、病苦に因るもの

ヴッカリ (Yakkhali 跋迦梨) 雜阿含47・増一阿19・相應部22

ヴッカリは病苦に堪えずして釈尊に訴えていう。「世尊、わが身の苦痛極めて堪忍し難し。刀を求めて自殺せんと欲す。苦しみて生きることを樂わず」と。これに対して釈尊は種々に説法して止め給うも、ヴッカリは病苦に堪えずして遂に刀を執つて自殺する。ところで阿難が、「ヴッカリは何れの日に四諦(さとり)を得しや」と問うのに対し、釈尊は「ヴッカリはすでに四諦をえて入涅槃せり」と答えていられる。

チュハンナ (Channa 闍陀・闍怒) 雜阿含47・相應部35・中部144

チュハンナも亦ヴッカリと同じように、病苦に堪えずして刀をもつて自害するのであるが、それについて舍利弗は、とくに「云何が世尊、かの尊者チュハンナは当に何れの趣に至るべきや」と問うのである。その

故は、チュハンナは、かつて教団の戒律に違反したこともあるものであり、しかも今現に病苦に堪えずして友の諫めの言葉も聴きいれずに自殺したのであるから、そのようなチュハンナの死後はどうなるのであろうかと問うたのである。ところが、それに対し釈尊は、「チュハンナに大過なし」と述べ、精進に道を求めたチュハンナの涅槃に入れることを云い給うはブツカリの場合と同じである。

二、求道上の困惑によるもの

ゴードイカ (Godhika 瞿低迦) 雜阿含39・相應部4

ゴードイカは精進に道を求めて証果をえても退転するのが常であった。彼はこのようにして、六度悟りをえて六度退転を繰り返したので、七度目の証果をえたときに、その証果の退転せんことを懼れて「我今まさに刀を以つて自殺すべし」と自害してしまふ。これについても釈尊は、弟子の問いに答えて、ゴードイカは平素精進に道を求めたが故に入涅槃せりと述べていられる。

三、釈尊の入滅をみるに忍びざるが故に

スプハッダ (Subhadda 須跋陀羅) 長阿含4 雜阿含35・別訳雜阿含6

ダッバ (Dabba 陀騾) 雜阿含・ウダーナ8

舍利弗 (Śāriputta) 増一阿18

スプハッダは「世尊の涅槃をとり給うこと(入滅)を見奉るに忍びず」といつて自害し、ダッバも亦同じ理由で焼身するが、それについても釈尊は、これらの人々の入涅槃を説いておられる。なお同じく阿含(増一18・19)によれば釈尊の二大弟子である目犍連も舍利弗も、釈尊の入滅を見るを忍びずして滅度をとらんとし自殺せんとした形跡がみられる。

すなわち舍利弗は再三再四、「世尊、我れ今、滅度をとらんと欲す、ただ願くは聴許し給え」というが、釈尊はその度ごとに、黙念として答へ給わず。しかしながら、舍利弗は諸比丘のために最後の説法をなし終つて郷里に歸り、疾をえてついに入滅したという。舍利弗の入滅するや、目連も亦同じように釈尊と問答し、やがて生国に歸り、禪定に入つて滅度をとつたと、この経の作者は伝えている。

阿含時代の自殺観

右の記述はいうまでもなく南伝ニカーヤ並びに漢訳阿含経に拠つたものである。しかしこれらの経は釈尊を中心と仰ぐ原始教団の面目を比較的忠実に描いた最古の經典であるとされるにもかかわらず、この經典のすべてが必ずしも歴史的事実であるわけではない。いな、阿含経はその道の専門家の指摘するように^{註2} 仏滅後数世紀の間に漸次成立したものの編集であり、殊に漢訳には阿育王に関する記事のあることによつても明かなように仏滅後二〇〇年以後のものまで含まれているのであつて、その点からいえば、これらの經典は歴史的事実と信仰による伝説との混合とみるべきである。ここに伝説といふのは仏教の感化影響をうけた当時の印度人が釈尊を尊崇するあまり、自分たちの思想感情を以つて想像し、或は美化して表現し、それを語り伝えたことをいう。たとえば前記、舍利弗や目犍連の入滅についての記述の如きは恐らくこれは伝説的付会とみるのが妥当であらう。

といふのは、最初に述べておいたように釈尊の根本教説は、当時の一部のバラモン教とは異つて自殺否定の立場にある。しかれば、その釈尊の二大高弟である舍利弗及び目犍連が、いかなる意味においても自殺を

肯定する道理はないわけであって、ここの記述は、釈尊を尊信する仏弟子の感情即ちやがて来るべき釈尊の入滅をみ奉るに忍びぬという仏弟子の愛惜悲痛の情を、このような叙事詩的表現をもって描出したとみるべきであらうから。

しかしながら、それはともかく、ニカーヤ並に阿含経によって、釈尊をはじめ釈尊の教説に深く影響せられた原始仏教時代の人々が、これら經典の製作者を含めて、実際にどのような死を考え、どのような自殺観を抱いていたかは、これによって理解することが出来る。

まず釈尊についていえば、釈尊が原則的には自殺を否定せられたことは前述のように明白であるが、しかし、それにもかかわらず、いかなる死者―したがって自殺者に対しても、釈尊の態度は極めて敬虔であって、あえて死者を鞭打つことはなかった。即ち自殺せんとするものに対しては、どこまでもその非を説いて思い止まらせようとするが、しかし既に自殺したものに対しては、無限の慈悲をもって、これを攝取してやまない。たとえば前述のヴッカリの、病苦に堪えずして執刀自殺するや、阿難の問いに答えて、釈尊は寂かに「ヴッカリは四諦をえて入涅槃せり」と合掌しておられる。そして、この釈尊の自殺及び自殺者に対する態度は、これから歴史的に叙述を展開していくことによって更に明かになるように、仏教の自殺及び自殺死に対する根本態度として伝統せられて今日にいたるものであるだけに重要視しされなければならぬ。そして特にキリスト旧教が自殺を罪惡として否定するあまり、自殺者は教会墓地に埋葬しないという峻厳な態度を持して今日にいたると彼此対照して注目すべきところであらう。^{註3}

第二に注目すべきは、釈尊の根本教説においては先述のように、ほんらい生も死も迷いであって、随ってたんなる死は生死流転(迷い)を意味し、人生問題の窮極的解決とはならないとする立場に出発している。しかしして、その生死流転を解脱して覚者(仏)となるところにこそ人間至高の目的がありとし、その覚者の境涯を涅槃といい、そのために仏陀は苦集滅道の四諦八聖道を説いたのであるが、それにもかかわらず、すでにニカーヤや阿含経において、死があたかも涅槃であるかの如き意味に転化している傾向のあることに注目しなければならぬ。

そもそも涅槃は、厳密には有余涅槃(有餘涅槃の解釈については問題もあるようであるが、一応、煩惱を断じたが、なお肉体の繫縛のある場合という在米の解釈によっておく)と無余涅槃(完全な涅槃)とに区別せられる。しかして悟れりというも、多くの場合、生存中は肉体の繫縛によって慨して有余涅槃であるところから、そしてその反面、死は肉体の繫縛の脱却を意味するところから、あたかも死即無余涅槃となり、そこから死が解脱であり涅槃であるかのような卑俗に顛落していく傾向を生じたのである。たしかに悟れりというも肉体を有する限り、その悟りは概して有余涅槃であろう。されば悟るといっても、多くの場合、身体滅してはじめて無余涅槃にいたると考えるに至るも亦当然であらう。

しかし、そこからして、一步誤ればゴデーカのように、道を求めて悟りをひらくと雖も、退転することのあるのを悲しむあまり、故意に自害して、無余涅槃に入らんとする病的な思想の生じたことは深く留意すべきである。これはいうまでもなく灰身滅智即ち身心の都滅を涅槃とみる小乗思想であって、しかもこのゴデーカのような自害成仏思想が

その後あとを断たなかったことは、世親（五世紀）の俱舍論廿五に六種阿羅漢を述べたうちに、思法羅漢なるものを挙げ、「思法と言うは、謂わく、退失を懼れて恒に自害せんことを思う」とあることによつて明らかである。

註1 釈尊の生誕及び仏滅の年代については諸説紛々であるが、一応通説によつた。詳しくは宇井伯寿著「印度哲学研究第二卷」仏滅年代論・参照。

註2 宇井伯寿「阿舎の成立に関する考察」（現代仏教名著全集第三卷）

註3 De la Vallée Poussin: Suicide (Brydhist), Encyclopedia of Religion and Ethics, Vol. 12. p. 24-26.

第二節 大乘仏教と自殺

以上、われわれは原始教団から小乗仏教にかけての、仏教の自殺に対する態度及びその様相を概述した。そして特に小乗時代になるにしたがつて、自殺否定の戒律のあるにもかかわらず、先述の如く死即涅槃の思想傾向の生ずるにいたつて、現実には非仏教的な利己的自殺の生じたことも指摘した、而して、これは印度人の民族宗教であるバラモン教や、殊に当時漸く抬頭してきた耆那教^{註1}の中で死即涅槃の立場をとつて、あたかも自殺を公認するかのような教説を流布した当時の印度社会の時代思潮をもあわせて考慮にいれなければならぬであろう。

ところで、紀元前後になつて、利他（衆生済度）を強調する大乘仏教の抬頭するや、仏教本来の立場から、このような厭身的利己的自殺は一応反省せられ否定せられるにいたつたようである。すなわち大乘戒の根柢となる梵網經菩薩心地戒品卷十には自殺を戒めて、(一)悪心を以つて厭

世自殺するものは勿論、(二)たとい善意からでも身を厭うて自殺するものも亦罪ありとし、ただ(三)「法のために身を滅し、衆生の為に命を捨つるが如きは即ち(菩薩の)持戒とす」とあつて、要するに利己的自殺を否定し、仏教徒として許されるのは、法のため衆生のために身を捨てねばならぬ利他の場合にのみ限ることを明かにしているのである。

しかして、このような仏法を求めため衆生を救うための結果としての自殺は、もはや自殺の範疇にいれるべきではないであろう。というのは、次に紹介する大乘經典中の本生説話によつて明かなように、菩薩は不惜身命に法を求め衆生を済度すべきであることを説くのが本意であつて、決して自殺そのものを説くものではないのであるから。

1 薩埵王子の捨身餓虎（金光明經・捨身品）

この説話の構成は、七匹の仔虎を産んだ母虎の餓え苦しんでいるのを見るに忍びないで、薩埵王子が一身を投げ捨てて虎の餌食になるといふ物語にはじまり、この薩埵太子とは、要するに釈尊の前生にほかならぬことを述べて、仏・菩薩の不惜身命の上求菩提・下化衆生の精神を明かにしようとした本生説話である。

2 雪山童子の捨身聞偈（涅槃經・聖行品）

この説話は、求道とは如何なるものであるか、そして仏教とは何であるかを教えるために、釈尊が昔々かつて雪山童子であつたとき、という表現形式をとつて、その雪山童子が真理の言葉、すなわち生滅滅已・寂滅為樂の半偈をきくために飢えた羅刹（鬼）に己の一身を投げ与えて悔いるところがなかつたという本生物語である。

3 藥王菩薩の焼身供養（法華經・藥王菩薩本事品）

この説話は薬王菩薩が仏恩に報いるために、わが身に香油を塗り且つ香油を飲み、自らの身を燃やしてみ仏に供養するという表現形式をとつたものである。これも亦、真の供養即ち仏道とは如何なるものであるかを象徴的譬喩的に述べたものである点においては前二者と同じである。

以上、概述したことによつて明かなように、これらはすべて法のため衆生のため、いかに身命を惜しまずにあるべきかという菩薩道即ち上求菩提・下化衆生の大乗の精神をあきらかにするために、譬喩的象徴的に表現したものであることはいうまでもない。したがつて、これらの経文そのものは如何なる意味においても自殺を肯定し、あるいは宗教的自殺を奨励するものでないことも明かであつて、ただ真の菩薩道はいかに不惜身命であらねばならぬかを説いたものであるにすぎない。

しかし、それにもかかわらず、ここに注目すべきは、前記金光明経の捨身餓虎や殊に法華経の焼身供養は、これらがともすれば形式的模写的に受容せられ、したがつてその後、^{註2}印度・支那・日本と仏教が伝統せられるにしたがつて、それぞれの国において捨身あるいは焼身者を出すことになるのである。

註1 宇井伯寿・「六師外道の研究」(印度哲学研究第二卷)のジャイナの項を参照。

註2 義浄の南海寄帰伝四(大正五四卷の二三一頁)には当時の印度における焼身供養・自殺の種々相がのべてあるが、同時にこれに対して著者義浄は仏教の立場から「一生の大事を誤る」ものとして批判している。

第三節 支那高僧伝と自殺

仏教の支那に流入したのは紀元一世紀頃であるが、幸い紀元二世紀

(後漢)から十三世紀(宋)に及ぶ間の史実を伝えたものとして、「高僧伝」(梁)「続高僧伝」(唐)「宋高僧伝」等(すべて大正大藏経巻五〇に収録)によつて、われわれはこれらの時代における支那仏教徒の自殺の一端を知ることができる。そして、これについては既に、稲垣真我教授のすぐれた研究が発表せられているのである。^{註1}

さて、これらの支那高僧伝のそれぞれの巻末にある亡身篇或は遺身篇によると、すくなくとも焼身者22名(梁8統5宋9)、捨身供養11名(梁3、統2宋6)、執刀自害7名(梁1統2宋4)、投身者6名(統3宋3)、総計四十六名である。次に、その代表的なもの三件を左に挙げてみよう。

(一) 薬王菩薩焼身供養の影響をうけたものの例

釈法羽、十五出家為慧始弟子。始立行苦修頭陀之業。羽操心勇猛深達其道。常欲仰薬王焼身供養。(中略)羽誓志既重、即服香油以布纏体、誦捨身品竟以火自燎。道俗觀視莫不悲慕。時年四十有五 (高僧伝巻十二亡身篇)

(二) 薩垂王子捨身餓虎の影響をうけたものの例

釈行明、俗称魯、幼従師子本部後遊方問道。(中略)終誓投軀、学薩垂太子超多劫而成聖果可不務乎。屢言之都不之信、忽於林間委身餓虎前争競食之須臾肉尽(略) (宋高僧伝巻二十三遺身篇)

(三) 投身往生の例

有山僧善導。周遊寰寓求訪道津。行至西訶遇道綽。惟行念仏

弥陀浄業。既入京師、広行此化、写弥陀経数万卷、士女奉者其数無量。時在光明寺、説法、有入告、導曰、今念仏名、定生浄土不。導曰、念仏定生、其人礼拝訖。口誦南無阿弥陀仏、声々次出光明寺門。上柳樹表合掌西望倒投身下。至地遂死。

(続高僧伝卷二十七、遺身篇)

※ 「梁」は高僧伝、「統」は続高僧伝、「宋」は宋高僧伝の略。

以上について、まず注目すべきことは、焼身又は執刀自害者が三高僧伝を通じて過半を占めていることである。そしてこれらが、その内容からして法華経薬王品の系統に属することは明白であつて、いかに法華の信仰が全時代を通じて中心であつたかが覗かれる。次いで、虎狼や蚊虻等に対する捨身供養がめだつが、これらはいうまでもなく金光明經の捨身餓虎の影響であり、その模倣であつて、とくに宋高僧伝に多い。

第三にこれらの自殺者の信仰が、前述のよう法華を中心としながらも、唐代の続高僧伝になると、禅、華嚴、念仏信仰が現われてくること、そして特に続高僧伝に支那浄土教の樹立者、善導の弟子が投身往生をとげたことが記述せられていることである。(事例(目参照)しかも、これらの浄土系の自殺者の自殺手段が、以上とは異つて投身(投身は樹上などの高所からのもの)又は入水であることも注目される。

第四に、これらの自殺者のうちの年齢のあきらかなもの二十名余をみると、二三を除いては概して高齢であつて、その平均年齢が約六十六歳であること。特に虎等に捨身供養の人々の年齢は、宋代の守賢の七十四歳が最低の年齢であり、その他はそれ以上の高齢者であることが注目をひく。

それでは、これらの自殺者に対して、高僧伝の撰者たちは、どのように取扱ひ、どのように批評しているのであろうか。

まず根本的には、それぞれの高僧伝の撰者が、これらの人々を高僧伝のうちに加え記録しているということ、即ち高僧として待遇しているということ、そのことにおいて、これらの撰者の根本態度を覗うことが出来る。しかし、それでは自殺そのものをも、撰者たちが肯定しているのであるかといえば必ずしもそうではない。

(梁)高僧伝の撰者慧皎も、続高僧伝の撰者道宣も、焼身捨身等の流行を暗に歎じて戒め、殊に道宣は厭生断命が離苦果(涅槃)でないことを明かにし、慧皎は尽寿行^{シテヲスルコトヲ}道が仏道であることを述べる^{註4}。しかし、かくはいえ、これらの焼身捨身等の高僧に対しては、撰者ことごとく敬虔の筆致を以つて叙述し、慧皎のごときは「千秋尚美、万代伝馨^{註5}」と結び、宋高僧伝の撰者贊寧にいたつては更に、厭世自殺は仏道の礙げであるが、しかし願往生、勇猛心からの捨身に何の罪があろうかと極言して、これらを讚美し且つ弁護する^{註6}。

以上わたくしは、支那高僧伝中の自殺者の概要と、それに対する撰者の態度の要旨を述べた。これによつて、われわれの知るところは、当時の支那仏教においても、自殺そのものは原則として罪であり過咎であること。されば前述のごとく、贊寧も亦これらの高僧の自殺を特別なものとして弁護せざるをえなかつた。しかしそれにもかかわらず、発心し修行して自殺せる信徒に対しては、畏敬の念をもつてこれを遇することも亦かの原始仏教の時代と變るところがないのである。

しかしながら、われわれは亦、原始仏教における仏弟子の自殺因とは

異ったものが、これらの支那高僧伝にあることに注目したい。それは前節にのべた大乘仏教の、法のため衆生のために身命を捨てる菩薩道の伝統であつて、たとえば虎豹豺狼に捨身した高僧伝記（既述）の如きは阿含経等には見出しえないものである。

しかしながら又、その反面、本節の始めに指摘したように、法華経薬王品（焼身供養）と金光明経捨身品（捨身餓虎）の信仰とその影響が強く、道宣も指摘するように、法のため衆生のため不惜身命に寿命のあらんかぎり道を求めるという大乘仏教の玄意が無視され、ただ形式的模写的にこれらの經典に依拠して焼身或は虎狼に捨身して仏果をえたいという傾向が一部に伝統せられたことに注目しなければならぬ。

次いで問題にすべきは、唐代における善導を中心とする浄土教の勃興と共に、次第に觀無量寿経等を所依の經典として浄土信仰が統高僧伝から宋高僧伝に現われてくることであつて、これも亦、厭離穢土・欣求浄土の真意を汲まぬ誤解から或は狂信から、一部において西方浄土を憧れての投身往生や入水往生を招来したことが注目せられる。そして、これらの背景には、死にさえすれば入涅槃する、或は往生するという仏教の退転と俗化が暗黙のうちにもあるわけであつて、げんに統高僧伝の撰者が厭生断命が決して離苦果の道でないことを懇切に説かざるをえなかつたことの背後には、このような俗信の一部に流布したことを物語るものであらう。

最後に、唐代の末期から盛んになった禅宗について一言しておかなければならぬ。宋高僧伝には第五祖弘忍をはじめとして第六祖慧能や臨濟禅の開祖義玄（臨濟八六六寂）の名も現われてくる。ところで前述した捨

身のうちには、もちろん禅系統の人々もあるわけであるが、この外にも、自殺とはいひ難いが、さりとて普通の死でもない、いわば禅宗独特の死に方のあることに注目したい。例えば、宋高僧伝の遺身篇に記載されないうで感通篇（卷二十）に載っている普化（八六〇寂）の如きがそれである。普化の言行の一端については殊に臨濟録・勘弁に、その面目躍如として描かれ、彼の最後については、次のように述べている。

我（普化）往^{キテ}東門^ニ遷化^シ去^リ・市人競隨^テ看^ル之^ヲ。普化云我今日未^シ。来日（明日の意）往^{キテ}南門^ニ遷化^シ。如是三日。人皆不^レ信。至^テ第四日^ニ無^シ人隨^テ看^ル。独出^テ城外^ニ自入^リ棺内^ニ償^フ路行人^ニ釘^レ之^ヲ。即時伝布市人競往開^キ棺^ヲ乃見^ル全身脱却^シ。

このように、普化は己の死期を予知し、ちかく遷化（俗にいえば死ぬこと）するといつて、街の人々を驚かし、しかも今日は今日とはと、いいながら、漸く四日目になつて棺に入り遷化したといふのである。註で、宋高僧伝には普化を前述のように遺身篇にいれていないところをみると、宋伝の篇者がこれを捨身と認めていないことは明かである。しかし普化の死は明かに普通の死ではない。それはまさに禅でいう大悟徹底せるものの遷化であることを示すものであらうか。

ここに遷化というのは、ほんらい菩薩のこの世における化縁尽きて他方仏土に遷^{うつ}りて化度することを意味する言葉であるが、要するに生死を超越して活自在の境涯にいたつたものがこの世をさることを遷化と禅家ではいふのであつて、普化の死はまさにこのような遷化であることを示そうとしたものであらう。しかしながら、このような生死に執着せずして活自在の境涯を重視する禅家の風は、その一步を誤れば、所謂野狐禅

に墮し、生を軽んじた一種の弊風の生じたことも亦注目すべきである。なお普化についても、臨濟録においてこそ、高く評価し、右の記事を掲げて称揚しているが、宋高僧伝の撰者は同じく右の記事を掲げて「排_二普化_一」と批判していることも付記しておきたい。

註1 稲垣真我「仏教と自殺問題」・仏教大学研究紀要35号・拙論の「支那高僧伝と自殺」の部分は、同教授のものに拠るところが多い。特記して感謝の意を表す。

註2 特にこのことは、わが国の平安朝以降の仏教徒の自殺者の年齢が概して若年齢（三十歳以下が多い）であると推定されるだけに、彼此対照して、相違の著しい点が注目される。詳しくは近く刊行される『日本人の自殺』（創文社）のうちの拙稿「わが国の仏教と自殺」参照のこと。

註3 大正大蔵・巻五〇・統高僧伝二十七・（六八五頁）

註4 大正・巻五〇・高僧伝十二・（四〇六頁上段）

註5 右に同じ（四〇六頁中段）

註6 大正・巻五〇・宋高僧伝二十三・（八六〇頁下段）

註7 普化については景德傳燈録卷一〇に詳しいが、内容は大同小異である。